

京都府における持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

平成24年4月変更

京都府農林水産部

目 次

第 1	導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容	
1	水稲	1
2	大豆(白大豆・黒大豆)	2-3
3	小豆	4
4	ナス	5
5	トマト	6
6	キュウリ	7
7	ダイコン	8
8	キャベツ	9
9	ハクサイ	10
10	カボチャ	11
11	ニンジン	12
12	ヤマノイモ	13
13	ホウレンソウ	14
14	コカブ	15
15	ミズナ・ミブナ	16
16	コマツナ	17
17	トウガラシ	18
18	ネギ	19
19	サツマイモ	20
20	ハナナ	21
21	スイカ	22
22	ブロッコリー	23
23	シュンギク	24
24	エビイモ (サトイモ)	25
25	イチゴ	26
26	ナシ	27
27	モモ	28
28	ブドウ	29
29	カキ	30
30	イチジク	31
31	チャ	32
32	トルコギキョウ	33
33	コギク	34
34	エダマメ (白大豆・黒大豆)	35-36
35	インゲン	37
36	エンドウ	38
37	ピーマン	39
38	ミニトマト	40
39	カブ	41
40	堀川ゴボウ	42
41	ジャガイモ	43

42	タマネギ	-----	44
43	クワイ	-----	45
44	シロナ	-----	46
45	葉ダイコン	-----	47
46	メロン	-----	48
47	タケノコ	-----	49
48	ウメ	-----	50
49	クリ	-----	51
50	温州ミカン	-----	52
51	麦類	-----	53
52	レタス	-----	54
53	山ブキ	-----	55
54	サンショウ (実・葉)	-----	56
55	ブルーベリー	-----	57
56	ショウガ	-----	58
57	アスパラガス	-----	59
58	セリ	-----	60
59	セロリ	-----	61
60	ツルムラサキ	-----	62
61	ニラ	-----	63
62	モロヘイヤ	-----	64
63	ミツバ	-----	65
64	シソ	-----	66
65	オクラ	-----	67
66	トウモロコシ	-----	68
67	胡麻	-----	69
68	ソバ	-----	70
69	キウイフルーツ	-----	71
70	ユリ	-----	72
第2	持続性の高い農業生産方式の導入を図るための措置に関する事項		
1	土壌診断の励行	-----	73
2	適切な施用資材の選択と効率的な施用法の実施	-----	73
3	発生予察に基づく適確な防除の実施	-----	73
第3	その他必要な事項		
1	土壌の性質の合理的な事項	-----	74
2	地域での集団的な取組	-----	74
3	関係補助事業の積極的な活用	-----	74
4	必要な機械・資材等及び資金の調達	-----	74

京都府における持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

第1 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

1 水稲

府内全域で、ほぼ同様な技術で取組むことが可能であるが、病害虫の多発地域や常発地では入念なほ場観察と病害虫発生予察情報に基づいた的確な防除時期を設定して、生育の初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数を低減する。

ほ場の土づくりは、家畜ふん尿たい肥や稲わらたい肥等の有機質資材を活用して実施するが、たい肥中の肥料成分を勘案し、窒素過剰とならないように、化学肥料等の施用量を節減するとともに有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）、被覆肥料等の肥効調節型肥料の施用や側条施肥等の局所施肥技術を組み合わせた施肥効率の向上と収量の維持を図ることが必要である。ただし、たい肥の窒素発現は緩やかであり、かつ、気温の影響を受けやすいため、ほ場ごとの窒素発現特性を把握して施肥設計を立て、有機物を用いた追肥の場合も緩効的な肥効発現を考慮して施用時期を設定する必要がある。

さらに、雑草対策としては、機械除草を基本として、除草剤使用回数を低減することとするが、地域によっては、アイガモ等の除草用動物の活用や紙、有機物等によるマルチを活用した特色ある稲作を行うこととする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくマメ科等の緑肥作物のすき込み ○ 河川敷、道路沿い等の雑草を刈り取り、たい肥化して施用 ○ 稲わらの春すき込みから秋すき込みへの変更 ○ 稲わらすき込み時の石灰窒素等の活用 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 7kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 温湯種子消毒技術 ○ 機械除草技術 ○ 除草用動物利用技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 種子伝染性病害、イネシンガレセンチュウ 雑草、斑点米カメムシ類 雑草 種子伝染性病害 雑草 	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家畜ふんたい肥等を施用したほ場では、植え付け時に濁水（肥料成分を含む。）を排出しない管理を心がける。 ○ 緑肥作物のすき込みをした場合には、還元障害を回避するよう管理する。 		

2-a 大豆（白大豆）

作付け予定ほ場には、家畜ふん尿たい肥等有機物資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

カメムシ類、サヤムシ類等には、病虫害発生予察情報に基づいて防除時期を失することなく、効果的に薬剤散布を行って化学農薬使用回数を低減する。

また、ハスモンヨトウ対策として生物農薬を利用したり、栽培面積が広い場合にはフェロモン剤を利用した大量誘殺法を活用する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み ○ 稲わらの他、河川敷、道路沿い等の雑草を刈り取り、たい肥化して施用 		1～2 t/10a 約 4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 3 kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	○ かん排水の徹底により根を健全に保ち、肥料利用率を高める。		

2-b 大豆（黒大豆）

作付け予定ほ場には、家畜ふん尿たい肥等有機物資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

ウイルス病については、ウイルスフリー種子を用いるか、黒大豆ウイルス対象のワクチンを利用する。カメムシ類、サヤムシ類等には、病虫害発生予察情報に基づいて防除時期を失することなく、効果的に薬剤散布を行って化学農薬使用回数を低減する。

また、ハスモンヨトウ対策として生物農薬を利用したり、栽培面積が広い場合にはフェロモン剤を利用した大量誘殺法を活用する。

移植栽培においては、育苗床を防虫ネットで被覆し、アブラムシ類等の飛来を防ぐ。雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み ○ 稲わらの他、河川敷、道路沿い等の雑草を刈り取り、たい肥化して施用 		1～2 t/10a 約 4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥等 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 3 kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 モザイク病、ハスモンヨトウ アブラムシ類等 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	○ かん排水の徹底により根を健全に保ち、肥料利用率を高める。		

3 小豆

作付け予定ほ場には、家畜ふん尿たい肥等有機物資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除は、病害虫発生予察情報に基づいて防除時期を失することなく、効果的に薬剤散布を行って化学農薬使用回数の低減する。

アブラムシ類対策として、播種時からシルバーテープを活用すると、ウイルス病発生を抑制できる。また、ウイルス病対策として抵抗性品種を利用する。また、ハスモンヨトウ対策として生物農薬を利用したり、栽培面積が広い場合にはフェロモン剤を利用した大量誘殺法を活用する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み ○ 稲わらの他、河川敷、道路沿い等の雑草を刈り取り、たい肥化して施用 		1～2 t/10a 約4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 3kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ、オオタバコガ モザイク病 アブラムシ類 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	○ かん排水の徹底により根を健全に保ち、肥料利用率を高める。		

4 ナス

作付け予定ほ場は、3月中旬までに、たい肥等有機質資材を投入し、排水性、保水性を高める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、青枯病等土壌病害対策として、トルバムビガー等抵抗性台木の接ぎ木苗を利用する。

アブラムシ類、アザミウマ類の発生拡大や雑草を抑えるため、シルバーマルチ等を被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。タバコガ類等による果実被害軽減のため、黄色蛍光灯を活用する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

ハウス栽培では、害虫（ハモグリバエ類、コナジラミ類等）侵入防止対策として、出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm 目合い）する。また、開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置する。内部では非散布型の黄色テープ剤を活用し、農薬使用回数を低減する。

コナジラミ類・ハモグリバエ類等の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップを設置して、害虫の発消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。また、露地栽培においては、ソルゴー障壁が天敵の密度の維持、増殖に有効であるので、積極的に活用する。

ハウス栽培で青枯病等の土壌病害の発生が問題となる場合は、熱水等の土壌消毒を行い、病原菌の死滅に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		3～5 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 穴肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 66kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 オオタバコガ、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アブラムシ類、アザミウマ類等 土壌伝染性病害 土壌伝染性病害 土壌伝染性病害 アブラムシ類、アザミウマ類、タバコガ類等 コナジラミ類、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

5 トマト

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。特に、ハウス内では地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥や置き肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、雑草防除を兼ねてマルチを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。また、ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来を抑制するため被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm目合い）する。

さらに、ハモグリバエ類、コナジラミ類に対してはハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置し、内部への害虫侵入量を減らす。また、内部では非散布型の黄色テープ剤を活用し、化学農薬使用回数を低減する。タバコガ類等による果実被害軽減のため、黄色蛍光灯を活用する。

コナジラミ類・ハモグリバエ類等の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により、害虫の発消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

萎ちょう病等土壌病害対策として、抵抗性台木・品種を利用する。また、灰色かび病には、発生初期に生物農薬を散布して化学農薬使用回数を低減する。

萎ちょう病等の土壌病害に対しては、熱水土壌消毒等を行い、病原菌の死滅を図る。また、褐色根腐病、ネコブセンチュウ等に対しては、土壌還元消毒を実施する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 穴肥や置き肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類、灰色かび病 土壌伝染性病害、ネコブセンチュウ 土壌伝染性病害、ネコブセンチュウ等 土壌伝染性病害、センチュウ類 アザミウマ類、ハモグリバエ類、コナジラミ類、タバコガ類等 コナジラミ類、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

6 キュウリ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。特に、ハウス内では、地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥や置き肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチまたはシルバーストライプマルチで被覆して、化学農薬使用回数を低減する。また、ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm目合い）する。内部では非散布型の黄色テープ剤を活用し、化学農薬使用回数を低減する。

アブラムシ類・コナジラミ類・ハダニ類の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により害虫の発生消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

露地夏秋及び抑制キュウリでは、ウイルスによる急性萎ちょう症対策としてワクチン接種苗を活用する。

つる割病や褐斑病対策として、抵抗性台木・品種を利用する。

また、ハウス栽培では、夏季の高温を利用した太陽熱土壌消毒を実施する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 穴肥や置き肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 50kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類 つる割病、褐斑病等 つる割病 ホモプシス根腐病、ネオブセンチュウ アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、コナジラミ類 アザミウマ類、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

7 ダイコン（聖護院ダイコン）

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、雑草防除を兼ねたシルバーマルチ等の被覆や播種後直ちに寒冷紗等の防虫ネットを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。

栽培面積が広い場合は、コナガや鱗翅目害虫の発生初期にフェロモン剤を利用した防除を行う。また、コナガ、アオムシ等には、発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

夏播き栽培で萎黄病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用したり、太陽熱土壌消毒により病原菌の死滅を図る。

センチュウ対策には、ダイコン作付け前に対抗作物として、マリーゴールドやギニアグラスを栽培する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 25kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 対抗植物利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 コナガ、アオムシ等 センチュウ類 萎黄病 萎黄病 ネグサレセンチュウ アブラムシ類 アブラムシ類、コナガ コナガ、ハスモンヨトウ等 雑草 	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥施用や緑肥作付けを行った場合は、岐根の発生を避けるため、すき込み後の追熟、腐熟を促す。 		

8 キャベツ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチ等を被覆する。また、育苗床では防虫ネットでトンネル被覆して、アブラムシ、コナガ等の飛来を防ぐ。

また、コナガ、オオタバコガには微生物天敵を適期に散布し、栽培面積が広い場合はフェロモン剤を利用して、化学農薬使用回数を低減する。

萎黄病や根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、オオタバコガ 萎黄病、根こぶ病 アブラムシ類 アブラムシ類、コナガ等 コナガ、オオタバコガ等 雑草	
その他の 留意事項			

9 ハクサイ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチ等で被覆する。

育苗床では、防虫ネットでトンネル被覆して、アブラムシ類、コナガ等を防除する。

本ほでのコナガ等の対策としては、生物農薬により防除を行う。また、栽培規模が広い場合はフェロモン剤利用を図る。

さらに、軟腐病には拮抗微生物として非病原性細菌を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 26kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、アオムシ、軟腐病 根こぶ病 アブラムシ類 アブラムシ類、コナガ等 コナガ、ハスモンヨトウ等 雑草	
その他の 留意事項			

10 カボチャ

栽培予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。この場合、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチ等で被覆し、ワタアブラムシ等の防除を行うことにより、化学農薬使用回数を低減する。

また、ウリノメイガの発生初期に生物農薬を使用し、化学農薬使用回数を減らす。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～1.5t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 15kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ウリノメイガ ワタアブラムシ 雑草	
その他の 留意事項			

11 ニンジン

栽培予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、畝内施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

生育初期の防虫ネット被覆やシルバーテープの利用により、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

また、ヨトウガの発生の発生を認めた場合は、発生初期に生物農薬を使用し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策として、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。なお、マルチは土のはね上げ防止による、軟腐病の発生軽減に有効である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 畝内施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10a 程度 (金時ニンジン 32kg/10a 程度)
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 ヨトウガ アブラムシ類 アブラムシ類、キアゲハ等 雑草、軟腐病 	
その他の 留意事項	○ たい肥施用や緑肥作付けを行った場合は、すき込み後の追熟、腐熟を促す。		

12 ヤマノイモ

栽培予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については栽培初期に、アブラムシ類、ケラやコガネムシ対策としてマルチ被覆し、化学農薬使用回数を低減する。また、シルバーポリマルチやテープを利用し、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

シロイチモジヨトウの発生を認めた場合は、発生初期に生物農薬を使用し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策として、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 穴肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 36kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 シロイチモジヨトウ アブラムシ類 雑草	
その他の 留意事項			

13 ホウレンソウ

栽培予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、アブラムシ類、ヨトウムシ等の被害を防ぐため、寒冷紗被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。

ハウスでは天井部を近紫外線カットフィルムで覆い、施設内部へのアブラムシ類、アザミウマ類等の侵入を防ぐ。また、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆することにより、ヨトウムシ等害虫の内部への侵入を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

また、ハウス周辺にビニルにより「ダニがえし」を設置し、ハウス内部への侵入を防ぐ。

ヨトウガやシロイチモジヨトウ等の発生を認めた場合は、発生初期に生物農薬を使用し、化学農薬使用回数を減らす。

べと病対策として、抵抗性品種を利用する。また、萎ちょう病対策として、夏季の高温を利用した太陽熱土壤消毒を実施する。

雑草対策として、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱土壤消毒利用技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ヨトウガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ べと病 萎ちょう病 萎ちょう病 アブラムシ類、アザミウマ類 アブラムシ類、ヨトウムシ、ハダニ類 雑草	
その他の 留意事項	○ たい肥は、2～3作程度で1回施用。連作が続く場合、必要に応じて減らすこと。		

14 コカブ

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。この場合、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学1肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、アブラムシ類やコナガ等の害虫の飛来を防ぐため、防虫ネットで被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。また、コナガ、アオムシ等の発生初期に生物農薬を利用し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。なお、シルバーマルチ等銀色の資材は、アブラムシ類に対して忌避効果がある。

ハウスでは天井部を近紫外線カットフィルムで覆い、施設内部へのキスジノミハムシ、ハモグリバエ類の侵入を防ぐ。また、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆することにより、キスジノミハムシ等害虫の侵入を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。また、立枯病や根こぶ病対策として、夏季の高温を利用した太陽熱土壤消毒を実施する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 17kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、アオムシ等 根こぶ病 立枯病、根こぶ病 アブラムシ類、キスジノミハムシ、ハモグリバエ類 コナガ、アブラムシ類、キスジノミハムシ 雑草	
その他の 留意事項	○ たい肥施用や緑肥作付けを行った場合は、すき込み後の追熟、腐熟を促す。		

15 ミズナ、ミブナ（小株栽培）

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。特に、ハウス内では地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、畝内施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

ハウス天井部は近紫外線カットフィルムで覆い、また、ハウスサイド等の開口部は防虫ネット（0.8 mm目合い）で完全に被覆することにより、キスジノミハムシ等の侵入を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

コナガ、アオムシ等には発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を減らす。コナガについては、フェロモン剤をハウス内に設置することで発生を抑制できる。

立枯病や根こぶ病対策に、夏季の高温を利用した太陽熱土壌消毒を実施する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 畝内施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 15kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、アオムシ等 立枯病、根こぶ病 キスジノミハムシ キスジノミハムシ、ヨトウガ、コナガ コナガ 雑草	
その他の 留意事項	○ たい肥は、3作程度に1回施用。連作が続く場合、必要に応じて施用量を減らすこと。		

16 コマツナ

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機物資材を投入する。特に、ハウス内では地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ等の飛来を防ぐため、べたがけ資材で被覆する。また、コナガ、ヨトウムシ対策として、生物農薬を利用する。ハウス栽培では、コナガ防除にフェロモン剤利用が有効である。

ハウスでは、天井部を近紫外線カットフィルムで覆い、施設内部へのキスジノミハムシ、ハモグリバエ類の侵入を防ぐ。また、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm目合い）で被覆することにより、キスジノミハムシ等害虫の内部への侵入を防ぎ、化学農薬使用量を低減する。

根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。また、立枯病や根こぶ病対策に、夏季の高温を利用した太陽熱土壤消毒を実施する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 30kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ等 根こぶ病 立枯病、根こぶ病 キスジノミハムシ、ハモグリバエ類 アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ等 コナガ 雑草	
その他の 留意事項	○ たい肥は、3作程度に1回施用。連作が続く場合、必要に応じて施用量を減らすこと。		

17 トウガラシ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。特に、ハウス内では地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥や置き肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、青枯病等土壌病害対策として、台パワー等抵抗性台木の接ぎ木苗を利用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、アザミウマ類等の飛来を抑制するため、被覆資材として近紫外線カットフィルムを活用するとともに、開口部は、防虫ネット（0.4mm目合い）で被覆して、コナジラミ類等の飛来を抑制する。さらに、コナジラミ類に対してはハウス開口部の外側に黄色粘着ロールを設置し、内部への害虫侵入量を減らす。アザミウマ類・アブラムシ類・ハダニ類の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により害虫の発生消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

タバコガ類等による果実被害低減のため、黄色蛍光灯を活用する。また、ハウス栽培では、フェロモン剤を利用してオオタバコガの発生を抑える。

ハウス栽培で青枯病等の土壌病害の発生が問題となる場合は、熱水等の土壌消毒を行い、病原菌の死滅に努める。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 穴肥や置き肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 30kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	対象病害虫		
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類 土壌伝染性病害 青枯病等 土壌伝染性病害 アザミウマ類、コナジラミ類、タバコガ類 アザミウマ類、タバコガ等 オオタバコガ 雑草 	
その他の 留意事項			

18 ネギ

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。この場合、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、雑草防除を兼ねてマルチで被覆する。また、マルチに光反射シートを利用すると、ネギアザミウマの飛来を抑制できる。

ハウス栽培では、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm）で覆い、ネギアザミウマやネギハモグリバエ等の侵入を防ぐ。また、ハウス外周に黄色粘着ロールを設置し、内部へのネギハモグリバエ侵入量を減らす。

栽培面積が広い場合は、フェロモン剤によりシロイチモジヨトウの発生を抑制する。また、シロイチモジヨトウの発生初期に生物農薬を効果的に使用し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 シロイチモジヨトウ 黒腐菌核病 ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ等 シロイチモジヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥は、2～3作に1回施用。連作が続く場合、必要に応じて施用量を減らすこと。 		

19 サツマイモ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。この場合、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、畝内施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。ハスモンヨトウやコガネムシ類対策として生物農薬を活用し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策として、黒マルチを被覆する。また、機械除草により、除草剤使用回数を減らす。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 畝内施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 5kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ、コガネムシ類	
	○ マルチ栽培技術	雑草	
その他の 留意事項			

20 ハナナ

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、播種時にべたがけ被覆を行う。コナガ、アオムシ、ヨトウガ等には発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

また、根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。なお、シルバーマルチ等銀色の資材は、アブラムシ類に対して忌避効果がある。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、アオムシ等 根こぶ病 アブラムシ類 コナガ、アブラムシ類、 ヨトウムシ等 雑草	
その他の 留意事項			

21 スイカ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、雑草防除を兼ねてマルチを被覆し、マルチにシルバーポリ等を利用し、ワタアブラムシ等の防除を行う。

ウリノメイガの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

つる割病対策として、抵抗性台木に接ぎ木した苗を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～1.5t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素分量 12kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ウリノメイガ つる割病 ワタアブラムシ等 雑草	
その他の 留意事項			

2.2 ブロッコリー

根こぶ病発生ほ場では、移植栽培を行う。

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥や置き肥等の局所施肥を実施したり被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、雑草防除を兼ねてマルチを被覆し、マルチにシルバーポリマルチ等を利用し、アブラムシ類の防除を行う。

また、アブラムシ類やコナガ等の飛来防止や軟腐病等の予防のため定植後、直ちに寒冷紗被覆を行う。寒冷紗除去後のコナガ等に対しては生物農薬や面積が広い場合は、フェロモン剤により防除を行う。

根こぶ病の発生が問題となる場合は、抵抗性品種を利用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥や置き肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 26kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、アブラムシ類、コナジラミ類 根こぶ病 アブラムシ類 アブラムシ類、コナガ等、軟腐病 コナガ、ハスモンヨトウ等 雑草	
その他の 留意事項			

23 シュンギク

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際してはたい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、アブラムシ類、ヨトウムシ等の被害を防ぐため、防虫ネット被覆や生物農薬等を利用することにより、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、天井部を近紫外線カットフィルムで被覆したり、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆し、ハモグリバエ類やアブラムシ類、ヤサイゾウムシ等の内部への侵入を防ぐ。摘み取り栽培では、雑草の発生を抑制するため、マルチ被覆する。

萎ちょう病や菌核病の発生が問題となる場合には、夏季の高温期に太陽熱土壌消毒を行う。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 抜き取り栽培 18kg/10a 程度 摘み取り栽培 22kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アブラムシ類、ヨトウムシ 萎ちょう病、菌核病 ハモグリバエ類 アブラムシ類、ヨトウムシ、 ヤサイゾウムシ等 雑草	
その他の 留意事項			

24 エビイモ（サトイモ）

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、畝内施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、アブラムシ類対策として、雑草防除を兼ねてシルバーストラップマルチで被覆する。また、エビイモではマルチを行わないので、土寄せを兼ねて機械除草を行う。

ハスモンヨトウの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～3 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 畝内施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 45kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ アブラムシ類 雑草	
その他の 留意事項			

25 イチゴ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機物資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、液肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

害虫防除については、定植後の寒冷紗等の防虫ネットを被覆することにより、化学農薬使用回数を低減する。マルチは苗の活着後に行う。

また、ハダニ類の侵入抑制のために、ハウス周囲の除草等を徹底する。

アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類に対して天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により、害虫の発消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

ハスモンヨトウやうどんこ病、灰色かび病の発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

炭そ病やうどんこ病等の対策として、抵抗性品種を利用する。

萎黄病の発生が問題となる場合は、夏季の高温期に太陽熱土壌消毒を行う。また、萎黄病には、土壌還元消毒も有効である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 液肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 18kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、うどんこ病、灰色かび病 炭そ病、うどんこ病等 萎黄病 萎黄病 アブラムシ類等 雑草	
その他の 留意事項			

26 ナシ

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材を11月に施用する。施肥に際してはたい肥等に含まれる窒素成分等を勘案して元肥の施用量を削減する。また、元肥として有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を使用する。

さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、局所施肥を実施する。

病害虫防除については、的確な発生予察に基づく病害虫防除と袋がけによる病害虫回避を徹底し、化学農薬使用回数を低減する。

フェロモン剤を樹木等に巻き付け、ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類を防除するとともに、ハマキムシ類等の発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

敷草等のマルチを敷くことにより雑草の発生を抑制するとともに、肥料成分の溶脱を軽減し、機械除草により除草剤使用回数を減らす。

黒斑病対策として、ゴールド二十世紀を栽植する。

吸蛾類やチャバネアオカメムシによる果実被害の軽減対策として、黄色蛍光灯を活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 15kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 黒斑病 吸蛾類、チャバネアオカメムシ カメムシ類、吸蛾類、黒斑病等 ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類 雑草	
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。		

27 モモ

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材施用を10月に施用する。

施肥に際してはたい肥等に含まれる窒素成分等を勘案して元肥の施用量を削減する。また、元肥としては、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を使用する。さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、通路部を明確にし、根のある部分のみへの施肥（局所施肥）を実施する。

病虫害防除については、6月下旬頃から8月下旬頃まで防虫ネット（6mm目合い）を被覆するとともに、的確な発生予察に基づく病虫害防除と袋がけによる害虫回避を徹底し、化学農薬使用回数の低減する。

フェロモン剤利用によりモモシンクイガ、モモハモグリガ等を防除するとともに、ハマキムシ類等の発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

敷草等のマルチを敷くことにより雑草の発生を抑制するとともに、肥料成分の溶脱を軽減する。また、機械除草により、除草剤使用回数を減らす。

吸蛾類やチャバネアオカメムシによる果実被害の軽減対策として、黄色蛍光灯を活用する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		3～5 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素分量 13kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 吸蛾類、チャバネアオカメムシ カメムシ類、吸蛾類、黒星病等 モモシンクイガ、モモハモグリガ等 雑草	
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。		

28 ブドウ

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材を10月に施用する。特に、大量施用する場合、窒素過多になりやすいので、たい肥等は、窒素成分の少ない物を使用する。

施肥に際してはたい肥等に含まれる窒素成分等を勘案して元肥の施用量を削減する。また、元肥としては、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用する。さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、局所施肥を実施する。

病虫害防除については、雨よけ施設栽培により病害回避を行う。また、的確な発生予測に基づく病虫害防除と袋がけによる害虫回避を徹底し、ハマキムシ類等の発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

チャノコカクモンハマキの発生が問題となり、栽培面積が広い場合は、フェロモン剤を利用して化学農薬使用回数を減らす。

吸蛾類やチャバネアオカメムシによる果実被害の軽減対策として、黄色蛍光灯を活用する。

敷草等のマルチを敷くことや機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づき家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～5 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 10kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 吸蛾類、チャバネアオカメムシ 黒とう病、べと病等 チャノコカクモンハマキ 雑草	
その他の 留意事項	○ 根域制限栽培を行うことにより、局所施肥となり、総施用量を減らすことができる。		

29 カキ

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材の施用を行い、11～12月に施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案して元肥の施用量を削減する。また、カキは深根性であるので、下層土の改良を重点的に考え、元肥としては、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を使用する。さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、通路部を明確にし、根のある部分のみへの施肥（局所施肥）を実施する。

病虫害防除については、的確な発生予察に基づく病虫害防除と袋がけによる害虫回避を徹底し、また、ハマキムシ類等の発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数の低減する。

敷草等のマルチを敷くことにより雑草の発生を抑制するとともに、肥料成分の溶脱を軽減する。

吸蛾類やチャバネアオカメムシによる果実被害の軽減対策として、黄色蛍光灯を活用する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素分量 23kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	対象病虫害		
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハマキムシ類、ケムシ類	
○ 光利用技術	吸蛾類、チャバネアオカメムシ		
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。		

30 イチジク

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材の施用を行い、11～12月に施用する。

施肥に際してはたい肥等に含まれる窒素成分等を勘案して元肥の施用量を削減する。また、元肥としては、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を使用する。さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、マルチ内へ施肥（局所施肥）する。

稲わら、敷草等のマルチを敷くことにより雑草の発生を抑制するとともに、肥料成分の溶脱を軽減する。

シルバーマルチや光反射シートを敷設し、アザミウマ類の飛来を防止し、キボシカミキリ食入防止対策には微生物天敵を利用して、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策として、機械除草やマルチ栽培により、除草剤使用回数を低減する。

株枯病の発生が問題となる場合には、抵抗性品種・台木の導入に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～2 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 16kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	対象病虫害等		
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	キボシカミキリ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木 利用技術	株枯病	
○ 光利用技術	アザミウマ類		
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項			

31 チャ

たい肥等の有機質資材によりほ場の土質改善を行う。また、たい肥等有機質資材に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、深層施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料や硝化抑制剤入り肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

なお、このような施肥法では、従来の品質を維持すること、有機質肥料でも窒素施用量が過剰にならないようにすることが必要である。

病虫害防除については、フェロモン剤を利用してチャノコカクモンハマキ、チャハマキの発生を、黄色ランプを活用してチャノホソガやハマキムシ類等のガ類の発生を抑制し、化学農薬使用回数を低減する。

また、チャノホソガやハマキムシ類の発生初期に生物農薬を散布する。

雑草対策としては、稲わら等の敷草マルチや機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 深層施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 覆い下 75kg/10a 程度 露天 56kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	チャノホソガ、ハマキムシ類等	
	○ 光利用技術	チャノホソガ、ハマキムシ類等	
	○ フェロモン剤利用技術	チャハマキ、チャノコカクモンハマキ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項			

32 トルコギキョウ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。特に、ハウス内では地力の消耗が激しいので、粗大有機物の施用に努める。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、液肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、アザミウマ類等の飛来を抑制するためハウスの出入り口・サイド等の開口部を完全に防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。

ハウス外周に黄色粘着ロールを設置し、コナジラミ類等の侵入を抑制する。また、マルチに光反射シート等を利用して、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

黄色蛍光灯を設置して、タバコガ類等夜ガ類の被害を軽減する。

青枯病等土壤病害の発生が問題となる場合は、熱水土壤消毒等を行い、病原菌の死滅を図る。

雑草防除を兼ねてマルチを被覆することにより、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 液肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10a程度
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 土壤還元消毒技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	土壤伝染性病害 コナジラミ類、アブラムシ類等 土壤伝染性病害 アザミウマ類、ヨトウガ、タバコガ類等 雑草	
その他の留意事項			

3.3 コギク

作付け予定ほ場は、遅くとも定植の1か月前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、アザミウマ類、ハモグリバエ類の拡大や雑草を抑えるため、シルバーストライプマルチ等を被覆し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス外周に黄色粘着ロールを設置し、コナジラミ類等の侵入を抑制する。また、マルチに光反射シート等を利用して、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

黄色蛍光灯を設置して、タバコガ類等夜ガ類の被害を軽減する。

ハウス栽培（寒コギク等）については、アザミウマ類等の飛来を抑制するため、ハウスの出入り口・サイド等の開口部を完全に防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。

軟腐病等の土壌病害の発生が問題となる場合は、蒸気等を利用した土壌消毒を行う。

露地栽培でタバコガ類等の侵入を防ぐ場合には、目合い4mm以下のネットで被覆を行う。

ハスモンヨトウ、オオタバコガの発生初期に生物農薬を散布する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 30kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	対象病虫害		
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	ハスモンヨトウ、オオタバコガ 土壌伝染性病害 アザミウマ類、ハモグリバエ類、コナジラミ類、アブラムシ類等 アザミウマ類、ハモグリバエ類、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

34-a エダマメ（白大豆）

作付け予定ほ場には、たい肥等有機質資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

害虫防除についてはほ場をよく観察して、防除が必要な場合は適期防除に努め、化学農薬使用回数を低減する。

根傷みにより発生が助長される土壌病害を防ぐため、中耕作業が遅れないようにする。

ハスモンヨトウ対策として発生初期に生物農薬を利用したり、栽培面積が広い場合には、フェロモン剤を利用した大量誘殺法を活用する。

雑草対策については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1 ～ 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 3 kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ かん排水の徹底により根を健全に保ち、肥料利用率を高める。 ○ ほ場周辺の除草に努め、害虫密度の低減に努める。 		

34-b エダマメ（黒大豆）

作付け予定ほ場には、たい肥等有機質資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

害虫防除についてはほ場をよく観察して、防除が必要な場合は適期防除に努め、化学農薬使用回数を低減する。

病害病除については、ウイルスフリー種子及びワクチンを利用して、ウイルス病の蔓延を防ぐとともに、根傷みにより発生が助長される土壌病害を防ぐため、中耕作業が遅れないようにする。

ハスモンヨトウ対策として発生初期に生物農薬を利用したり、栽培面積が広い場合には、フェロモン剤を利用した大量誘殺法を活用する。

移植栽培においては、育苗床を防虫ネットで被覆し、アブラムシ類等の飛来を防ぐ。雑草対策については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 3 kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 モザイク病、ハスモンヨトウ アブラムシ類等 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ かん排水の徹底により根を健全に保ち、肥料利用率を高める。 ○ ほ場周辺の除草に努め、害虫密度の低減に努める。 		

35 インゲン

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除についてはほ場をよく見回り、初期防除に努めるとともに、うどんこ病や菌核病の発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、天井部を近紫外線カットフィルムで被覆したり、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆し、ハモグリバエ類やアブラムシ類等の内部への侵入を防ぐ。

雑草対策については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 13kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 うどんこ病、菌核病 ハモグリバエ類等 アブラムシ類、アザミウマ類等 雑草	
その他の 留意事項			

36 エンドウ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除についてはほ場をよく見回り、初期防除に努めるとともに、うどんこ病や灰色かび病の発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、天井部を近紫外線カットフィルムで被覆したり、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆し、ハモグリバエ類やアブラムシ類等の内部への侵入を防ぐ。

雑草対策については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 10kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 うどんこ病、灰色かび病 萎ちょう病 ハモグリバエ類等 アブラムシ類、アザミウマ類 等 雑草	
その他の 留意事項			

37 ピーマン

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、アザミウマ類等の飛来を抑制するため、被覆資材として近紫外線カットフィルムを活用するとともに、開口部は、防虫ネット（0.4mm目合い）で被覆して、

コナジラミ類等の飛来を抑制する。さらに、コナジラミ類に対してはハウス開口部の外側に黄色粘着ロールを設置し、内部への害虫侵入量を減らす。アザミウマ類・アブラムシ類・ハダニ類の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により害虫の発生消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

タバコガ類等による果実被害低減のため、黄色蛍光灯を活用する。また、ハウス栽培では、フェロモン剤を利用してオオタバコガの発生を抑える。

ハウス栽培で青枯病等の土壌病害の発生が問題となる場合は、抵抗性台木を利用したり、熱水等の土壌消毒を行い、病原菌の死滅に努める。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～5 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 40kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類 土壌伝染性病害 土壌伝染性病害 土壌伝染性病害 アザミウマ類、コナジラミ類、タバコガ類 アザミウマ類、タバコガ等 オオタバコガ 雑草	
その他の 留意事項			

38 ミニトマト（施設）

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、雑草防除を兼ねてマルチを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。また、ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来を抑制するため被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm目合い）する。

さらに、ハモグリバエ類、コナジラミ類に対してはハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置し、内部への害虫侵入量を減らす。また、内部では非散布型の黄色テープ剤を活用し、農薬使用回数を低減する。タバコガ類等による果実被害軽減のため、黄色蛍光灯を活用する。

コナジラミ類・マメハモグリバエ等の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により、害虫の発生消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

萎ちょう病等土壌病害対策として、抵抗性台木・品種を利用する。また、灰色かび病には、発生初期に生物農薬を散布して化学農薬使用回数を低減する。

萎ちょう病等の土壌病害に対しては、熱水土壌消毒等を行い、病原菌の死滅を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 土壌還元消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	アブラムシ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類、灰色かび病 土壌伝染性病害、ネコブセンチュウ 土壌伝染性病害、ネコブセンチュウ等 土壌伝染性病害、センチュウ類 アザミウマ類、ハモグリバエ類、コナジラミ類、タバコガ類等 コナジラミ類、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

39 カブ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、雑草防除を兼ねたシルバーマルチ等の被覆や播種後直ちに寒冷紗等の防虫ネットを被覆して、アブラムシ類、キスジノミハムシ、コナガ等の侵入、増殖を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。また、コナガやアオムシ、ヨトウガの発生初期に生物農薬を散布する。

栽培面積が広い場合は、コナガや鱗翅目害虫の発生初期にフェロモン剤を利用した防除を行う。

病害防除については同一ほ場での連作を避け、草勢の維持に努める。根こぶ病対策として、資材による酸度矯正を行い、多発ほ場では抵抗性品種を利用する。また、立枯病や根こぶ病対策として、夏季の高温を利用した太陽熱土壤消毒を実施する。

雑草対策については、機械除草により抑草に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ、ハスモンヨトウ 根こぶ病 立枯病、根こぶ病 アブラムシ類 アブラムシ類、キスジノミハムシ、コナガ等 コナガ、アオムシ、ヨトウガ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 転炉砕や石灰資材により土壌酸度を矯正し、根こぶ病の発生を回避、軽減する。 		

40 ゴボウ（堀川ゴボウ）

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

害虫防除については生育初期のアブラムシ類、ゾウムシ類の侵入、増殖を防ぐため、寒冷紗等で被覆する。また、シルバーテープを展張し、アブラムシ類の飛来を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

土壤病害対策として同一ほ場での連作を避けるとともに草勢の維持に努める。

雑草対策については、敷きわらマルチや機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 22kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 光利用技術	アブラムシ類	
	○ 被覆栽培技術	アブラムシ類、ゾウムシ類	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項	○ 同一ほ場でのキク科野菜の連作を避ける。		

4.1 ジャガイモ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、同一ほ場での連作を避け、敷きわらマルチにより疫病の感染、増殖を防ぐ。軟腐病やコガネムシ類対策については、発生前に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

除草については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 10kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
		対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 軟腐病、コガネムシ類 疫病、雑草	
その他の 留意事項			

4.2 タマネギ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、育苗中は不織布等の資材を活用しアブラムシ類、タマネギバエ等の侵入、増殖を防ぐ。本ぼでは初期防除に努めるとともに、シロイチモジヨトウや軟腐病の発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 19kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 シロイチモジヨトウ、軟腐病 アブラムシ類、タマネギバエ 等 雑草	
その他の 留意事項			

4.3 クワイ

作付け予定ほ場には、定植の21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については同一ほ場での連作を避け、草勢の維持に努めるとともに、適期防除に努め、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策については機械除草を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 35kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
その他の 留意事項			

4.4 シロナ

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類、コナガ、ヨトウガ等の飛来を防ぐため、べたがけ資材で被覆する。また、コナガ、ヨトウガ対策として生物農薬を利用する。ハウス栽培では、コナガ防除にフェロモン剤利用が有効である。

ハウスでは、天井部を近紫外線カットフィルムで覆い、施設内部へのキスジノミハシ、ハモグリバエ類の侵入を防ぐ。また、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm 目合い）で被覆することにより、キスジノミハムシ等害虫の内部への侵入を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

立枯病や根こぶ病対策に、夏季の高温を利用した太陽熱土壤消毒を実施する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 30kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ等 立枯病、根こぶ病 キスジノミハムシ、ハモグリバエ類 アブラムシ類、コナガ、ヨトウガ等 コナガ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥は、3作程度に1回施用。連作が続く場合、必要に応じて施用量を減らすこと。 		

4.5 葉ダイコン

作付け予定ほ場には、作付けの10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、畝内施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類、コナガ、ヨトウガ等の飛来を防ぐため、べたがけ資材で被覆する。

また、コナガ、ヨトウムシ対策として生物農薬を利用する。ハウス栽培では、コナガ防除にフェロモン剤利用が有効である。

ハウスでは、天井部を近紫外線カットフィルムで覆い、施設内部へのキスジノミハムシ、ハモグリバエ類の侵入を防ぐ。また、サイド等開口部を防虫ネット（0.8mm目合い）で被覆することにより、キスジノミハムシ等害虫の内部への侵入を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

立枯病や軟腐病対策に、夏季の高温を利用した太陽熱土壌消毒を実施する。

雑草対策としては、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 畝内施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 30kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 コナガ等 立枯病、軟腐病 キスジノミハムシ、ハモグリバエ類 アブラムシ類、コナガ、ヨトウガ等 コナガ 雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ たい肥は、3作程度に1回施用。連作が続く場合、必要に応じて施用量を減らすこと。 		

46 メロン

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチまたはシルバーストライプマルチで被覆して、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm 目合い）する。内部では非散布型の黄色テープ剤を活用し、農薬使用回数を低減する。

アブラムシ類・コナジラミ類・ハダニ類の対策として、天敵昆虫を利用する場合は、粘着トラップの設置等により害虫の発生消長の把握に努め、害虫の発生確認後は直ちに天敵を導入する。

つる割病やうどんこ病対策として、抵抗性台木・品種を利用する。

また、つる割病等の土壌病害の発生が問題となる場合は、熱水等を利用した土壌消毒を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～5 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 17kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		
	○ 生物農薬利用技術	ウリノメイガ、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、ハモグリハエ類、うどんこ病、灰色かび病等	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	つる割病、うどんこ病等	
	○ 熱利用土壌消毒技術	土壌伝染性病害	
	○ 土壌還元消毒技術	土壌伝染性病害	
○ 光利用技術	アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類等		
○ 被覆栽培技術	アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、ハモグリハエ類、ウリノメイガ、ウリハムシ等		
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項			

47 タケノコ

土壌の物理性改善のために稲わら等有機質資材を施用する。

また、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。さらに、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、穴肥等の局所施肥を実施する。

病虫害防除については、適切な施肥による健全な生育を目指す。また、発生時は早期に被害葉の除去や捕殺を行う。

雑草対策として、雑草発生時には機械除草を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく稲わらなどの有機質資材の施用		0.5 ～ 1t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 28kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
その他の 留意事項			

48 ウメ

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

病害虫防除については、整枝・せん定・草刈り等園の管理を適切に行って、病害虫の多発を防ぐとともに、フェロモン剤を活用して化学農薬使用回数を低減する。

ハマキムシ類等の発生初期に、生物農薬を散布する。

雑草対策については、マルチ（草生栽培）や機械除草により、 除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 15kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 コスカシバ 雑草	
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。		

49 クリ

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

病虫害防除については、整枝・せん定・草刈り等、クリ園の管理を適切に行って、病虫害の多発を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

クリ園に定着しているクリタマバチの天敵チュウゴクオナガコバチを保護するため、剪定枝の持ち出しは天敵羽化後（5月中旬頃）とし、クリタマバチ羽化期（6月下旬～7月上旬）まで殺虫剤の散布を控える。

また、抵抗性品種を栽植して、クリタマバチの被害を軽減する。

雑草対策については、マルチ（草生栽培）や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～3 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 16kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	カミキリムシ類、コウモリガ、雑草	
	○ 生物農薬利用技術	クリタマバチ	
	○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術	クリタマバチ	
	○ マルチ栽培技術	カミキリムシ類、コウモリガ、雑草	
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。 ○ キクイムシ類については園内及び園周辺の倒木の除去を、カミキリムシ、アブラムシ類、クスサンは卵のたたきつぶし、クリタマバチは枝せん定、間縮伐を励行して、農薬使用回数を低減する。		

50 温州ミカン

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

病虫害防除については、整枝・せん定・草刈り等、ミカン園の管理を適切に行って、病虫害の多発を防ぐとともに、ゴマダラカミキリには微生物天敵、ハダニ類には天敵を利用して、化学農薬使用回数を低減する。

除草については、マルチ利用や機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ゴマダラカミキリ、ハダニ類	
○ マルチ栽培技術	アザミウマ類、雑草		
その他の 留意事項	○ シルバーポリマルチ被覆は、全面被覆が望ましいが、処理面積はほ場面積の70%以上でも良い。		

51 麦類

作付け予定ほ場には、家畜ふん尿たい肥等有機物資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、側条施肥や中耕時に条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

播種前に温湯種子消毒を実施して、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策としては機械除草を基本として、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み ○ 河川敷、道路沿い等の雑草を刈り取り、たい肥化して施用 		1～2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 側条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素分量 10kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 温湯種子消毒技術 ○ 機械除草技術 	<ul style="list-style-type: none"> 種子伝染性病害 雑草 	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家畜ふんたい肥等を施用したほ場では、植え付け時に濁水（肥料成分を含む。）を排出しない管理を心がける。 ○ 緑肥作物のすき込みをした場合には、還元障害を回避するよう管理する。 		

52 レタス

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を施用する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチ等を被覆する。また、育苗床では防虫ネットでトンネル被覆して、アブラムシ類、タバコガ類等の飛来を防ぐ。

オオタバコガの発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 20kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 オオタバコガ アブラムシ類 アブラムシ類、タバコガ類 等 雑草	
その他の 留意事項			

53 山ブキ

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

雑草対策については、マルチ利用や機械除草を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～2 t /10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用		窒素成分量 18kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○機械除草技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 雑草	
その他の 留意事項			

5.4 サンショウ

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

雑草対策については、マルチ（草生栽培）や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 7kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 雑草	
その他の 留意事項			

55 ブルーベリー

土壌の物理性改善のためにたい肥等有機質資材の施用を行い、11～12月に施用する。ブルーベリーは浅根性であるので、乾燥害を避けるため有機物による樹幹下マルチで管理する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

病虫害防除については、的確な発生予察に基づく病虫害防除で化学農薬使用回数を低減する。イラガ類等の発生初期に生物農薬を利用する。

敷草等のマルチを敷くことにより雑草の発生を抑制するとともに、肥料成分の溶脱を軽減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		0.5～3t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 土壌診断に基づく適切な有機肥料施用		窒素成分 9kg/10a程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術		樹幹下マルチ 樹幹下厚さ 10cm程度
	○ 機械除草技術	対象病虫害等 雑草	
	○ 生物農薬利用技術 ○ マルチ栽培技術	イラガ類等 雑草	
その他の 留意事項	○ 鳥害防止のためネットを活用する。		

56 ショウガ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、ハスモンヨトウやオオタバコガの発生初期に生物農薬を散布して、化学農薬使用回数を低減する。また、露地の大規模栽培の場合には、黄色蛍光灯の利用によりアワノメイガ等の被害軽減が、また、フェロモン剤の利用によりハスモンヨトウの被害軽減が可能である。ハウス栽培の場合は、害虫の飛来、侵入を抑制するために、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm目合い）する。

除草については、機械除草や敷きわらによるマルチにより除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 29kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ フェロモン剤利用技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ、オオタバコガ アワノメイガ、ハスモンヨトウ等 アブラムシ類、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アワノメイガ ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項			

57 アスパラガス

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、局所施肥を実施する。

病虫害防除については、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用量を低減する。斑点病、さび病、茎疫病対策に、耐病性品種を利用する。ハスモンヨトウ、オオタバコガに対しては、黄色蛍光灯の利用が有効である。ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来を抑制するため被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm 目合い）する。さらに、ハモグリバエ類、コナジラミ類に対しては、ハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置すると、内部への侵入量を減らすことができる。また、マルチ栽培や雨除け栽培により茎枯病の発生を抑制し、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策については、マルチ栽培により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 35kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬利用技術 ○ 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ 斑点病、さび病、茎疫病 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類 茎枯病、アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類等 茎枯病、雑草	
その他の 留意事項			

58 セリ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類対策として生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素成分量 18kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	○ 生物農薬利用技術	アブラムシ類	
その他の 留意事項			

59 セロリ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、アブラムシ類やヨトウガの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、ハモグリバエ類等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm 目合い）する。さらに、ハモグリバエ類、アブラムシ類に対してはハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置すると、内部への侵入量を減らすことができる。また、ハウスの太陽熱土壤消毒や土壤還元消毒は、葉枯病対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 42kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 土壤還元消毒技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アブラムシ類、ヨトウガ 葉枯病 葉枯病 ハモグリバエ類、アブラムシ類 アブラムシ類、ハモグリバエ類、ヨトウガ 雑草	
その他の 留意事項			

60 ツルムラサキ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、ヨトウガやハスモンヨトウの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、アブラムシ類等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm目合い）する。

また、ハウスの太陽熱土壤消は、ネコブセンチュウ対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 18kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ヨトウガ、ハスモンヨトウ ネコブセンチュウ アブラムシ類 アブラムシ類、ヨトウガ、ハスモンヨトウ 雑草	
その他の 留意事項			

61 ニラ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、ハスモンヨトウやヨトウガ、アブラムシ類の発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、ネギアザミウマ等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm 目合い）する。さらに、ネギハモグリバエ、アブラムシ類に対してはハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置すると、内部への侵入量を減らすことができる。

また、ハウスの太陽熱土壤消毒や土壤還元消毒は、ネグサレセンチュウ等の対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 21kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 土壤還元消毒技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ、ヨトウガ、アブラムシ類 ネグサレセンチュウ 黒腐菌核病、ネグサレセンチュウ アブラムシ類、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ アブラムシ類、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ 雑草	
その他の 留意事項			

62 モロヘイヤ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、アブラムシ類の発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。

ハウス栽培では、アブラムシ類やアザミウマ等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm 目合い）する。また、ハウスの太陽熱土壤消毒は、ネコブセンチュウ対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 25kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アブラムシ類 ネコブセンチュウ アブラムシ類、アザミウマ類 雑草	
その他の 留意事項			

63 ミツバ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、ハウス栽培では、アブラムシ類等の飛来、侵入を抑制するために、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm 目合い）する。

また、ハウスの太陽熱土壤消毒は、立枯病やセンチュウ類の防除対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～4 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 14kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 熱利用土壤消毒技術	立枯病、ネコブ・ネグサレセンチュウ	
	○ 被覆栽培技術	アブラムシ類、ハスモンヨトウ、ヨトウガ、キアゲハ	
○ マルチ栽培技術	雑草		
その他の 留意事項			

64 シソ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、ハスモンヨトウ、ヨトウガの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。ハウス栽培では、コナジラミ類等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.4mm 目合い）する。さらに、コナジラミ類、アブラムシ類に対してはハウス開口部の外側に、黄色粘着ロールを設置すると、内部への侵入量を減らすことができる。

また、ハウスの太陽熱土壤消毒は、斑点病やネコブセンチュウの防除対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素分量 21kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ、ヨトウガ 斑点病、ネコブセンチュウ アブラムシ類、アザミウマ類、 コナジラミ類 アブラムシ類、アザミウマ類、 コナジラミ類、ハスモンヨトウ、 ヨトウガ 雑草	
その他の 留意事項			

65 オクラ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

アブラムシ類防除については、雑草防除を兼ねてシルバーマルチを被覆することにより化学農薬使用回数を低減する。

病虫害防除については、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガの発生初期に生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。ハウス栽培では、アブラムシ類、アザミウマ類等の飛来、侵入を抑制するために、被覆資材に近紫外線カットフィルムを活用したり、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm 目合い）する。

また、ハウスの太陽熱土壤消毒や土壤還元消毒は、苗立枯病や疫病、センチュウ類の防除対策として有効である。

雑草対策については、マルチ栽培や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壤診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壤診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 32kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 土壤還元消毒技術 ○ 熱利用土壤消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ 苗立枯病、疫病、ネコブ・ネグサレセンチュウ アブラムシ類 アブラムシ類、アザミウマ類 雑草	
その他の 留意事項			

66 トウモロコシ

作付け予定ほ場には、定植の10～21日前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

病虫害防除については、アワヨトウ、オオタバコガの発生初期に、生物農薬を散布し、化学農薬使用回数を低減する。ハウス栽培では、害虫の飛来、侵入を抑制するために、ハウスの出入り口・換気口等を完全に防虫ネットで被覆（0.6mm目合い）する。なお、連作ハウスの場合は、収穫終了後の太陽熱土壌消毒の実施により、さび病及び苗立枯病の発生の軽減が可能である。

雑草対策については、マルチ活用、機械除草により除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～3 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 21kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 アワノメイガ、オオタバコガ さび病、苗立枯病 アブラムシ類、アワノメイガ、 アワヨトウ、オオタバコガ 雑草	
その他の 留意事項			

67 胡麻

作付け予定ほ場には、たい肥等有機質資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

機械除草及びマルチ栽培により、雑草の繁茂を抑制する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2 t /10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 9kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 機械除草技術 ○ マルチ栽培技術 	雑草 雑草	
その他の 留意事項			

68 ソバ

作付け予定ほ場には、たい肥等有機質資材を計画的に投入し、土壌の保水性、透水性を高め、併せて緩効的な肥効を確保する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、被覆肥料等の肥効調節型肥料を活用する。

ハスモンヨトウの発生に注意し、発生初期に生物農薬を散布する。また、大規模集団栽培においては、フェロモン剤の利用も有効である。

雑草対策は機械除草を基本として、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		1～2t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料の施用 		窒素分量 3 kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	
	○ 機械除草技術	雑草	
	○ 生物農薬利用技術	ハスモンヨトウ	
○ フェロモン剤利用技術	ハスモンヨトウ		
その他の 留意事項			

69 キウイフルーツ

土壌の物理性改善のため、たい肥等有機質資材を施用する。

施肥に際しては、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、根域への局所施肥を実施する。

病虫害防除については、整枝・せん定・草刈り等園の管理を適切に行って、病虫害の多発を防ぎ、化学農薬使用回数を低減する。

雑草対策については、マルチ（草生栽培）や機械除草により、除草剤使用回数を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用		1～2 t/10a
化学肥料 低減技術	○ 局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用		窒素成分量 15kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病虫害	
	○ 機械除草技術 ○ 生物農薬利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 カメムシ類、果実軟腐病 雑草	
その他の 留意事項	○ 園内の土壌改善する部分（根域）への局所施用によって、総施用量が抑制できる。		

70 コリ

作付け予定ほ場は、遅くとも定植の1か月前までにたい肥等有機質資材を投入する。

施肥については、たい肥等に含まれる窒素成分等を勘案するとともに、有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む。）を活用して、化学肥料の施用量を削減する。また、化学肥料の施用の合理化と省力化を同時に進めるため、条施肥等の局所施肥を実施したり、肥効調節型肥料を活用する。

病害虫防除については、アザミウマ類の拡大や雑草を抑えるため、シルバーストラップマルチ等を被覆し、化学農薬使用回数を低減する。

黄色蛍光灯を設置して、タバコガ類等夜ガ類の被害を軽減する。

土壌伝染性病害の発生が問題となる場合は、蒸気等を利用した土壌消毒を行う。

露地栽培でタバコガ類等の侵入を防ぐ場合には、目合い4 mm以下のネットで被覆を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づく家畜ふんたい肥等有機質資材の適切な施用 ○ 土壌診断に基づくイネ科等の緑肥作物のすき込み 		2～4 t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 条施肥等の局所施肥 ○ 肥効調節型肥料の施用 ○ 土壌診断に基づく適切な有機質肥料施用 		窒素成分量 20kg/10a 程度
化学農薬 低減技術	導入する個別技術	対象病害虫	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 熱利用土壌消毒技術 ○ 光利用技術 ○ 被覆栽培技術 ○ マルチ栽培技術 	土壌伝染性病害 コナジラミ類、アブラムシ類等 アザミウマ類、ヨトウガ、タバコガ類等 雑草	
その他の 留意事項			

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1 土壌診断の励行

たい肥等の有機質資材の施用や、有機質肥料や化学肥料の適正施肥を行うには、土壌診断を実施することが不可欠である。これから作物を栽培しようとする土壌の理化学性を把握し、適当な施用資材を選択し適正な施用量を明らかにすることが、土壌環境の改善及び環境負荷の低減につながる。

土壌診断を実施するため、各農業改良普及センターには、土壌分析施設が整備されている。

持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、このような土壌診断体制の積極的な活用を図るとともに、資材の施用量等の決定に関し、普及指導員等から診断結果を踏まえたアドバイスを受け、土壌環境の改善と施肥の合理化に努めることとする。

2 適切な施用資材の選択と効率的な施用法の実施

有機質肥料（たい肥その他の特殊肥料を含む）や肥効調節型肥料の利用に当たっては、肥料分量や肥効発現速度の異なるものが多数流通しているため、栽培する農作物の吸肥特性に合致した肥料の適切な選択が行われる必要がある。なお、有機質肥料には、油粕等の植物質肥料、魚かす等の動物質肥料が含まれ、肥効調節型肥料には、普通肥料のうちアセトアルデヒド縮合尿素、イソブチルアルデヒド縮合尿素、オキサミド、被覆加里肥料、被覆窒素肥料、被覆複合肥料、ホルムアルデヒド加工尿素、硫酸グアニル尿素、これらの肥料の1種類以上が原料として配合されるもの又は土壌中における硝酸化成を抑制する材料が使用されたものを含んでいる。

また、肥料利用率を高めるためには、農作物の栽培様式に応じた的確な位置、時期に施肥を行うことが大切である。

持続性の高い農業生産方式を導入しようとする農業者は、最寄りの農業改良普及センター、JA等のアドバイスを受け施肥の合理化に努めることとする。

3 発生予察に基づく的確な防除の実施

持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、要防除水準を適切に設定できるよう、京都府病虫害防除所からの予察情報等を有効に活用するとともに、それに基づく天敵農薬等による防除の効果的な実施に関し、普及指導員、病虫害防除所職員等による巡回指導を活用する等適宜アドバイスを受けることが重要である。

第3 その他必要な事項

1 土壌の性質の合理的な改善

土壌は、農作物の栽培期間を通じて水分や肥料成分を適切に供給し、併せて根の活動を維持するため酸素供給も行う。土壌のこれらの機能を整えるために、保肥力を向上させたり、透水性や通気性、保水性、土壌硬度等の物理的な性質や、土壌酸度や養分バランス等の化学的な性質、微生物の多様性といった生物学的な性質について、総合的に向上させる土づくりが必要である。

土づくりを行うには、たい肥の施用や緑肥作物、稲わら等収穫残さのすき込み等々を実施し、必要に応じて土づくり肥料及び土壌改良材の施用を行う。なお、たい肥を連用する場合は、含有する肥料分量を考慮して施肥量を調整する必要がある。また、ほ場の排水性を確保する暗きょ等の施工や作土層の拡大のための深耕が必要である。

なお、地力増進地域において地力増進対策指針が定められている場合にあっては、持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、同対策指針の内容に即した改善策を行うことが必要である。

2 地域での集団的な取組

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組むことにより、フェロモン剤を利用する防除等の効果を効率的に得たり、たい肥等の運搬・散布等の作業の省力化等が図れることから、持続性の高い農業生産方式を導入する場合は、集落内の営農者やJ A、農業改良普及センター等と相談するなど、極力集団で取り組むことが重要である。

3 関係補助事業の積極的な活用

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組む場合は、農業改良普及センターによる濃密指導や実証ほの設置等による技術の確立、たい肥舎等の共同利用施設の建設による生産条件の整備等を推進することが重要となることから、これらを総合的に実施するため、必要に応じて関係補助事業を積極的に活用することが適当である。

4 必要な機械・資材等及び資金の調達

持続性の高い農業生産方式の導入には、新たな営農用機械や資材等を整備する必要があることがある。これらの農業機械、資材は、慣行の生産方式の実施に用いるものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、導入を行うことが肝要である。

また、これらの農業機械、資材等を整備する場合には、取組の初期段階における経営的な負担の軽減を図る観点から、必要に応じ、無利子貸付資金である農業改良資金等の制度資金を積極的に活用することが適当である。